

# 福岡貿易会会員リレーエッセイ

株式会社トクスイコーポレーション  
代表取締役会長 徳島 建征 氏

## 「今年の一文字」と地球温暖化」

### 【新年のご挨拶】

明けましておめでとうございます。いよいよ新しい年が始まり、今年の“抱負”や“展望”を交わすことも多い時季ですが、皆さまはどのような2026年を思い描かれたでしょうか。私は例年、秋頃から考え始めるのですが、最近では将来や展望を図りかねることが多く、内容をとりまとめるのに一苦労。というのも、せっかく厳しいコロナ禍が明けて、待ち望んでいた明るく豊かな世界に戻るはずが...まさか今のような、世界規模の難題が次々と持ち上がる混迷の世界になってしまうとは、想像すらしませんでした。

結局、私の“今年のお〇〇”は、あまりの地政学リスク“群”や国内外に難題が山積している現状に鑑みて、シンプルに一文字で『備』とすることにしました。先行き不透明な今だからこそ、不確実性の高い局面を見据えて短中長期に備えつつ、コツコツやるしかない...と覚悟する次第です。

では一体、何にそんなに備えようとしているのか。想定している厳しい展望は公私(?)にわたって多々ありますが、今回は会社の主要事業のひとつである水産業界を例に紐解いてみます。次のリストは、昨年2025年の国内・海外の水産主要ニュースやトピックを見出し的にざっと抜粋したのですが、まずはご覧ください。

### 【水産業界の国内動向】

- ①瀬戸内海：養殖カキが海洋熱波により壊滅的な大量死
- ②青森：養殖ホタテが2年連続で大量死。再生産危機説も。
- ③北海道：秋サケの歴史的な不漁が継続し、イクラ価格・供給に波及
- ④三陸：サンマ漁獲は増加したが、全盛期(30万トン)の2割水準
- ⑤北海道：ウニなど冷水性資源の漁獲低迷

により価格が暴騰

- ⑥スルメイカ：小型船で豊漁も、近年平均を基準にしたTACを超過し採捕停止
- ⑦資源管理：ブリや技術・操業形態(沖合底びき網など)もTAC対象の議論へ
- ⑧九州：赤潮による養殖ブリ被害
- ⑨海苔：不作と価格高騰で国産海苔離れ、輸入品への切替が進行
- ⑩産業構造：養殖業者の倒産・休廃業が「過去最多ペース」

### 【水産業界の海外動向】

- ①ノルウェー：有害藻類ブルーム(HABs)により春と秋に養殖サーモン大量死
  - ②ニュージーランド：有害藻類ブルーム(HABs)による北部での貝毒警報
  - ③バレンツ海：北東北極タラが大幅減枠(1991年以来の低水準)
  - ④ベーリング海：海洋酸性化とカニの資源量の減少に因果関係
  - ⑤ペルー：アンチョベータのTACが「養殖コスト」と「漁獲変動」を左右
  - ⑥米国・北東部で資源不足によるアマエビの禁漁期間が3年延長
  - ⑦豪州・西オーストラリア：海洋熱波で沿岸魚類の大量死
  - ⑧NOAA：世界各地のサンゴ白化が深刻化し、沿岸漁業・生態系に直結するリスク報告
  - ⑨ICCAT：大西洋まぐろ類でTAC増枠
  - ⑩IOTC：インド洋マグロで「能力船腹抑制」へ(日本遠洋マグロ延縄船3割削減方針等)
- \*TACは「Total Allowable Catch(漁獲可能量)」の略

### 【地球温暖化と水産業界への影響】

これらは、一見脈絡もない羅列のようですが、全体を俯瞰してみると『地球温暖化』というキーワードで繋がっています。海水温の上昇や熱波、赤潮などのHABs、海洋酸性化や貧酸素化、大気と海洋の流れなど、複合する